

日清・日露戦争時期(1894-1905)における韓国キリスト教の日本認識

洪 伊杓 (京都大学大学院博士課程)

1.はじめに

「雲揚号事件」(1876)と「甲申政変」(1884)など日本と関係のあるこれらの事件によって、朝鮮での反日意識はより強まった。その結果、「斥倭」を掲げた「東学農民革命」(1894)が起きると同時に、この革命を鎮圧するため日清両国の軍隊が朝鮮に進出し、「日清戦争」が起こった。東学革命の指導者全琫準は、「日本蛮夷を追放し、政治を清めなさい」(逐滅倭夷、澄清聖道)という「挙兵名義四か条」を発表した。これだけをみても東学農民革命の目標は「反封建」及び「反外勢」、特に「反日」に包括されていた。文禄・慶長の役(壬辰倭乱)以後に深く根付いた朝鮮民衆の反日認識をよく表している。¹全琫準はその後、日本軍に逮捕され、裁判を受ける時にも「日本軍が王宮を襲ったので怒りがおさまらず義兵を閨閣して日本人と戦おうとした」²と答えた。このような認識に対して琴乗洞は、「それが個人の日本観にとどまらず、ほとんど全国民の日本観だった」³と評価した。では西欧近代文明の先頭にあったキリスト教は、当時の朝鮮民衆の一般的「対日観」とどのような相違点を持ったのだろうか。本論考は、明治期の日本が西欧の近代化をアジアにおいて先駆的に達成していった過程を眺める韓国のキリスト教が、朝鮮侵略において発生した二度の戦争、すなわち「日清」及び「日露」戦争時期にどのような日本認識を形成していったのかを考察するものである。

2. 「日清戦争」及び「乙未事変」前後の日本認識

(1) 扶植された日清戦争の「義戦論」

近代国家として変貌した明治期の日本は、「朝鮮が清国の禍難から永遠に脱して治安を回復させ東洋全体の平和を維持する」⁴という大義名分の下、日清戦争を起こした。すなわち、日清戦争を不当な清国の圧制から朝鮮を救うための「義戦」として演出した。後日、非戦論者とされた内村鑑三ですら旧約のギデオン勇士がミディアンを撲滅したように、日清戦争は「利益を追求するための戦争ではなく、神聖な人間性を高揚するための戦いであり、永久的な平和を目的にして戦う義戦である」⁵と主張した。このように日本は日清戦争によって朝鮮の権利が拡大されたと錯覚した。

ところが、「大韓毎日申報」では「韓国を掌握」⁶し「韓国に対する清国の権利を強奪するための戦争に過ぎない」⁷と批判し、報道した。これと比較して韓国キリスト教界は、日清戦争を宣教拡張の重要な機会として活用しようと試みた。アンダーウッドは、「現在、日本人たちが平壤に進出しているように、私たち(米人)もそこに進出するべきであり、義州はその戦陣基地にならなければならない」⁸と日清戦争前後の日本の勢力拡大を宣教活動に利用しようとした。⁹南メソジスト教会の最初の改宗者である尹致昊も、日清戦争について「日本は更生する希望がある朝鮮を助けるだろう」¹⁰とし、日本の勝利は「朝鮮を改革し、極東のスイスをつくり上げる絶好の機会」¹¹と信じた。日本の軍隊が朝鮮の領土を強奪する原因は、むしろ「腐

敗した朝鮮政府の無能力が原因」¹²だと断定した。

「この(日清)戦争は、革新的な西欧の文明と墮落的な東洋の野蛮との衝突だ。日本の勝利は、朝鮮の救いと清国の改革を意味する」

「朝鮮人は自らの状況を改善させる能力がないので、日本やイギリスのような国の支配の下に入って行く方がむしろ朝鮮の祝福だ」¹³

このような観点から尹致昊は日清戦争が終わった直後には、「基督教化の次には日本化が朝鮮には最大の祝福になるだろう」¹⁴と語っている。しかし、尹も時には東学農民革命時の残忍な鎮圧と日清戦争の勝利以後から変わってしまった日本の態度、すなわち日本では近代化のために努力を惜しまないが朝鮮ではそれらが実践されない事に失望した。¹⁵梁賢恵は尹に対して「非道徳的な国家である清国への敵対感と日本や西欧諸国への好意という夢想的な二分法に」¹⁶はまり、日本帝国主義の裏側には西欧諸国の侵略的属性がそのまま内在していることを看過していると批判した。すなわち、尹の日本認識には非現実的な浪漫の要素が存在した。尹の日本に対するこのような憧れと劣等意識は、開港期に日本に派遣された「修信使視察団」が明治期の日本から受けた衝撃と同じ流れを汲んでいる。¹⁷つまりそれは、「学日」を通して日本のようにになりたいという憧れと劣等感、「知日」を通して日本が遂行してきた門戸開放と富国強兵を朝鮮でも実現しようとする主体的意思が交差する心理状態であった。日清戦争時期にみられた尹のような日本認識は、当時の韓国キリスト教の日本認識を代表すると考えられる。

(2) 「乙未事変」(閔王后殺害事件)前後の日本認識

日清戦争での勝利以後、日本は朝鮮において順調に政治勢力を拡大していった。しかし、閔王后(明成皇后)がその動きに抵抗し自主的な立場をとった。結局1895年10月8日、日本公使館は日本の浪人たちを派遣して閔王后を殺害する。この事件は、王室と友好関係を結んできたプロテスタント宣教師たちに大きな衝撃を与えた。閔王后の独断を批判していた尹も、この日本の蛮行に対しては怒りを表した。¹⁸

「ヨーロッパ人が日本に対しておこなったことよりも、日本人は卑劣な方法で朝鮮におこなっている」¹⁹

「殺人と暗殺、これが日本が導入した改革と文明の花と言うのか」²⁰

特にアンダーウッド夫婦とエビソンは、閔王后と王立学校の設立問題に関して論議したところであった。²¹当時の日本の勢力は、アメリカ宣教師が主導する王立学校の設立を警戒したが、これに対してアンダーウッドも敏感に反応した。²²乙未事変は、アンダーウッドとエビソンが学校設立に関する最終計画書を提出する二週前に発生²³したため、来韓宣教師たちは大きな衝撃を受けると同時に日本に対する否定的な認識を強く持つことになった。

一方、乙未事変勃発直後、親日内閣に包囲されて「乾清宮集玉齋」に閉じこめられていた高宗は、アメリカ宣教師たちに自分を警備するように要請した。その結果、アンダーウッド、ジョーンズ、ゲール、ハルバート、エビソンなどが銃を持ち夜間警備を実施した。²⁴さらには、1895年11月28日に高宗をアメリカ公使館にかくまおうとしたが失敗に終わった、いわゆる「春生門事件」が起きる。乙未事変後、窮地に追い込まれていた日本政府と日本の新聞は、一斉にアメリカ宣教師たちが主導したこの事件を責めた。「漢城新報」は閔王后の支援で教会と学校を建立しようとしていた一部のアメリカ人宣教師が閔王后の死に対し

て「復讐の欲望で燃えていた」²⁵と伝えた。「中央新聞」はこの事件を報道しながら宣教師たちが「熱烈なキリスト者だった王妃の死の仇を討とうとした」²⁶と伝えることで閔王后がキリスト者であったと強調した。このような報道は日本基督教婦人矯風会の会報「婦人新報」の1895年12月号でも「朝鮮の故王妃は基督教徒也」²⁷という題目で日本社会に伝えられている。閔王后が実際にキリスト者であったかに関する問題は現時点では証明することができないが、当時のプロテスタント宣教師たちと信頼関係を形成し、乙未事変によって一部の宣教師とキリスト者たちが反日認識を初めて強く持つことになったのは確かである。乙未事変以後、国際的な非難に直面した日本は、これを契機として「国王争取事件」と名づけ逆に責任を押し付ける作業に没頭した。²⁸結局、日本政府は、このような言論操作と外交的努力から乙未事変直後の国際的非難と孤立の状況を乗り越えた。そして、この事件は10年後に発生する日露戦争での勝利と朝鮮の植民地化に重要な分岐点になった。

したがって、乙未事変と春生門事件は来韓宣教師を含む韓国キリスト教会の一般的な反日認識の原点とみなすことができる。西洋帝国主義と共に流入したキリスト教に対してアジアの被宣教地では一般的には拒否感を持つが、韓国はむしろ同じアジアの隣国である日本による侵略を被りながら、西欧キリスト教が朝鮮人と連帯して「反日」認識を共有することになった。そこで、この二つの事件は韓国キリスト教が「学日」の浪漫的(楽観的)な態度に安住するよりは、「知日」を通して近代日本の実態を冷静に把握させる契機となった。

3. 「日露戦争」前後の日本認識

(1) 「日露戦争」以前の反露意識の拡散

日清戦争の勝利以後から「乙未事変」直後(1894-1896)まで日本は朝鮮に対して強気の姿勢をみせていたが、高宗の「俄館播遷」成功後には親露派勢力が朝鮮を支配することになった。1895年5月22日の清露密約後、ロシアは極東アジア膨脹主義政策の下で日本の勢力を追放し始めた。²⁹しかし、ロシアの南下を警戒したアメリカは、対日協助政策に切り替えて行った。このような時期にプロテスタント信徒であった徐載弼が発行した「独立新聞」は、ロシア正教会の拡大を警戒する記事を報道し、ロシア勢力の拡張に敏感に反応した。

「ロシア政府が大韓帝国に度支顧問・エルネクシエフ氏を発令し、ロシアと大韓帝国間の商務を復興させる計画があり、イギリス及び日本の商務と競ってみることを促し、希臘校堂(ロシア正教会)をソウルに設置するように命じたという」³⁰

この直後、中国で発生した「義和団運動」(1900)に対して「皇城新聞」はそれが「東洋の禍根」³¹となり白人種が黄人種を脅かす原因になると憂いた。そこで白人種に属したロシアの南下は「義和団事件」後から強化された白人種の勢力拡張として認識された。しかし、同時に「大陸への進出を試みる日本の植民政策も警戒しなければならない」³²という声も共存した。1902年1月に成立した「日英同盟」は日本を警戒したロシアを刺激し、このような緊張状況は「キリスト新聞」も注視している。³³1902年から満洲に駐屯していたロシア軍は、1903年4月の撤退を延期し満洲の独占支配を宣言しながら緊張はより高まっていた。

日露間の緊張関係はアメリカ政府の反露政策を強化した。結局ハルバート、アンダーウッドなど来韓した宣教師たちや韓国人キリスト教指導者たちにも影響を及ぼした。来韓宣教師たちはロシア南下によっ

てロシア正教会が支配的宗教になってしまうと、長期間の宣教活動によって成し遂げられた学校、病院、教会などの宣教財産が喪失される可能性があるという危機感を持った。宣教地の保護という現実的課題は、宣教師たちが乙未事変によって持ち始めた反日認識を反露認識によって相殺させた。始終日本を批判したアレン(Allen, Herace Newton)も日本との友好関係を強調する方向へと変化していった。

「日本人の金鉱要求件において、日本に好意を施さないことはアメリカに決して有利ではない。日本はこれから確かにロシアとの角逐で優勢を見せて、朝鮮政府に強大な影響を及ぼすだろう。このような状況で日本に反対することは賢明ではない仕打ちだ。」³⁴

「俄館播遷」以後、親露派が勢力を伸ばすと、プロテスタント宣教師たちは独立協会を助け高宗の誕生祝い行事を主導するなどロシア勢力を牽制して皇室との信頼関係を形成しようと努力した。1897年8月13日独立協会の紀元節行事の場で、アペンゼラー(Henry G. Appenzeller)は「韓国における外国人の義務」という演説を行い、1896年11月21日の独立門起工式の時にも「朝鮮独立が何万年経っても崩れないように、この独立門が永遠にこの場を守りますように」と祈った。また培材学堂の合唱団を動員して「朝鮮歌」と「進歩歌」を歌うなど、アペンゼラーをはじめアメリカ宣教師は独立協会と緊密に協力した。1905年の乙巳條約と1910年の日韓併合を主導した李完用が独立協会の初代会長となり、尹致昊などと共に独立門の建立にも関与し協会を支持した韓国キリスト教は、反清、反露認識に基づいた親日的グループと深く関わっていた。

一方、カトリックのミューテル(G.C.M.Mütel)司教は、長い間カトリック教会に迫害を加えた朝鮮王室(政府)に対する嫌悪感によって、その延長線上に存在する大韓帝国皇室と密接に関わるプロテスタント宣教師たちの行動を批判した。さらに、衰退していく皇室の運命に対しては始終座視し、冷淡に反応した。³⁵ それに比べプロテスタント宣教師のロシアに対する反感は強く保持された。³⁶ ロシアの膨脹主義者スペイエル(Alexis de Speyer)は、アレンとの会談(1897.10.14)において「アメリカ人宣教師は韓国の徐載弼のような反露・親日人物と親しくなり、ロシアの軍事顧問の派遣を反対し、陰謀を図る政治的な友人(political friends)である」と責めるほどであった。後に、反日運動家になるハルバートも次のように反露的態度を示した。

「ロシアの統治を受けるよりかえって日本の影響圏に入る方がより少ない屈辱感を感じると信じる。ロシア人は改革を語らなかつたが、日本は改革を主張している。これは、利他的な動機からではなく韓国の繁栄が日本とまったく同じ潮流の影響を受けるからだ。」³⁷

このように日露戦争が勃発すると、ロシアより日本の勝利を望むのは「最も卑劣な日本人もウオッカを飲む正教会のロシア人と比べると紳士であり、学者であろう」³⁸と言った尹致昊にも同じく見ることができる。1900年に親露派の勢力が主導した「屠戮密旨事件」もロシアに対する否定的な認識を拡散させた。

1901年に「日露交渉」が進められた時、アンダーウッドは米国長老教会の宣教局総務であったブラウン博士の報告書を批判しながらロシアの朝鮮侵略よりは、日本のそれの方がまだと明らかにする。³⁹ 日本も「紛争触発」の主体になりえると考えたが、アンダーウッドでさえ最悪よりは次悪を求める現実的な判断を持ったことが分かる。その最大の理由は、ロシア南下が実現すれば長年の韓国での宣教投資がすべて失われるかもしれないという否定的な展望を持ったためだった。⁴⁰

ゲール(James S. Gale)は、アンダーウッドの意見に反論を申し立てた。つまり、正教会はフランスなどの

カトリック国家をより警戒するので、プロテスタントとは友好関係を維持することができるという主張だった。しかし、アンダーウッドは「それは、ただ蓋然性に過ぎない」⁴¹と一蹴した。これは当時のアンダーウッドが乙未事変などで感じた日本に対する反感以上にロシアを嫌悪していたことを示している。このような来韓宣教師たちの変化は、「俄館播遷」以後に経験したロシアの政治的横暴及び正教会を盾にしたプロテスタント宣教に対する攻撃による被害意識が大きく影響を及ぼしたと見える。高まった反露認識の反作用の効果から日本に対する温情的な感情が生じたのだろう。アンダーウッドは基本的に戦争に反対する立場だったが、「海西教案」の発生などで国家の紀綱が根本的に瓦解された状態で大転換が必要だと考えていた。⁴²つまり、「戦争」が避けられない宿命的事態ならば、それによって新しい肯定的な局面が現れることを望んでいた。

来韓宣教師の大部分は乙未事変による日本に対する衝撃と失望を感じたにも拘わらず、日韓関係を共に築く他ない「運命共同体」とみなしたようだ。ロシアの南下は、結局日本と韓国が長年の間蓄積して来たプロテスタント宣教資産を脅かすと考えたからだ。さらには、1909年に伊藤博文(朝鮮統監府統監)を暗殺したカトリック信者の安重根も「国事や政治に奔走することはなかったが、乙巳五條約を通して初め悟った」⁴³と訊問調書で告白したことを見ると、日露戦争の時まで日帝の「侵略の本性」と実態を明確に認識した人々は、特にキリスト教の中でも多くなかったようだ。開化派(朴泳孝グループ)志向だった父親の安泰勳の影響下で育った安重根は、日清戦争に対しても長年の中国の従属から朝鮮が脱し得たことは、日本の助けがあったためだと確信していた。⁴⁴

(2) 「日露戦争」以後の日本認識の変化

日本が戦争を宣布し、1904年2月8日に旅順軍港を攻撃することから日露戦争が勃発した。1905年9月5日に講和条約を結ぶまで、この戦争は朝鮮半島の全域と満洲の一部で行われた。アンダーウッドやハルバートなど来韓宣教師も戦争以前の立場同様に日本の勝利を願った。⁴⁵1904年2月、日本の勝利を楽観視するアンダーウッドはそれによって韓国の宣教環境も改善されると期待した。

「戦争の雰囲気は、日本側により有利だという事実を知ることになるでしょうし、日本が果たした成果にも接したことでしょ。こちらは静かです。…平壤近隣で戦闘があったので、その地域の方々の安全を心配しました。…ソウルの活動はいつも通りよく進められています。…展望は以前より明るいです。この戦争によって(韓国の)門戸がさらに開放されると確信します。」⁴⁶

多数の来韓宣教師は大韓帝国に対する基本的な憐れみと同情を持ち、日本が急速に近代化したように大韓帝国も同じような道を歩むことを願った。このような期待が日露戦争での日本支持につながった。すなわち、日本の勝利は結局プロテスタント宣教に有利だろうという信頼につながったのである。乙未事変以後から形成された反日認識は「俄館播遷」以後から形成された反露認識を圧倒することはできなかった。

日露戦争勃発直後、国内新聞の中で「皇城新聞」も「満洲を失うと我が国(大韓帝国)と中国が危険になり、ロシア勢力が必ず東洋に広がる。日本の存亡もつながっている所以日本が戦うことは不可避である」⁴⁷とし、日露戦争を満洲と朝鮮、そして日本の自衛的な戦争として認識した。このように大韓帝国時代の世論は、ロシアと日本両国の膨脹主義に対して牽制しながらも「韓国の領土保全を公約した日本」に対する相対的な好意を明確にした。⁴⁸アメリカ留学時代に経験した人種差別によって白人に憎悪を抱いて

いた尹致昊も、「白人を追い、凌ぐようになる」⁴⁹ことを決心したことがあった。結局、尹は驕慢な白人が応酬される瞬間を想像するほどであった。⁵⁰その時、劣等国家から文明国として変身した日本というモデルが期待を膨らませた。白人と黄人の戦争として認識された日露戦争での日本の勝利の意味を尹は次のように述べた。

「日本がロシアを撃破したことは嬉しい事だ。この島国の人々は黄人種の名譽を擁護した。白人は数世紀の間、東洋の人種を支配しながら、主人の席にあまりにも長く座っていた。日本が単独にこの白人の魔力を崩そうと考えること自体がすごいことである。… 私は黄人種の一員として日本を愛し、尊敬する」⁵¹

梁賢恵は、この当時の尹が持っていた日本認識を「代理的な復讐者としての日本」⁵²と規定し、尹の発想を「妄想」と評価した。しかし、それが決して「妄想」であるだけではない。なぜなら、伊藤博文を狙撃した安重根も「東洋平和論」を展開しながらロシアの南下政策を強く批判⁵³し、実際には外勢の侵略の中でもロシアを最も恐れ、白人に対する警戒心も大きかったからだ。⁵⁴伊藤暗殺のため逮捕された後に作成された「訊問調書」を見ると、日本の実態を十分に把握することができなかった日露戦争当時には、安重根も日本が韓国の代わりにロシアと戦ってくれたと認識していたからだ。⁵⁵

日露戦争での日本の勝利が確定すると、「皇城新聞」は「韓清両国の独立領土を扶植鞏固するため大義旗を挙げた義戦」⁵⁶としながら肯定的な評価を下した。しかし、イギリス人ベセル(E.T.Bethell)が梁起鐸などと共に創刊した代表的な反日新聞であった「大韓毎日申報」は、勝戦直後から日本を強く批判した。開戦から日本は大韓帝国の内政に必要以上に干渉し、経済的侵害もひどくなったからだ。⁵⁷尹もいくら日本を支持したと言っても「無条件に」尊敬しているわけではなかった。⁵⁸実際に、日露戦争勝利以後、急速に日本は朝鮮内で蛮行を始めたからだ。1905年9月7日の尹の日記には「私は黄人種の一員として日本を愛して尊敬するが、韓国人としては韓国のすべてのもの、独立までも奪っている日本を憎悪する」⁵⁹と複雑な内面を吐露し、次のような過激な非難まで登場した。

「荒れ地の開墾権要求は、今まで韓国で行われた狡猾な日本人の活動のなかでも、最も破廉恥で極悪無道な面である。それは併合、そのものである。」⁶⁰

東西洋の二つの帝国主義国家の間で行われた最初の戦争であった「日露戦争」の時期に、日本人は「日清戦争」の時と類似する義戦論に埋没した。1904年の「官報」では、「韓国は実に(日本)帝国の安危と密接な関係を持つ。… もし満洲を露国が領有することになれば、韓国の保全はもちろん極東の平和も期待することができない」⁶¹と発表した。これは日清戦争直後、朝鮮の主導権を確保した日本がすでに朝鮮を「内地日本」の「外地」(植民地)として確保したことを自覚していたことを意味する。すなわち、日露戦争の段階になってからは、朝鮮を越えて満洲地域にまでを自己の利益として念頭に置き始めたのであり、これは「外地」の無限な拡張性に対する欲望を意味した。当時の日露戦争の流れは、欧米諸国に「キリスト教(正教会)国家であるロシア」と「異教徒国(神道・仏教)である日本」の間の戦争というイメージが非常に強かった。したがって、日本は西洋列強に蔓延していた日本に不利な世論を無くすために、キリスト教(メソジスト教会)の指導者である本多庸一などをヨーロッパに使節団として派遣するなどの努力をみせた。⁶²結果的に、その努力は来韓欧米人宣教師の日露戦争に対する反応と態度だけ見ても非常に効果的であった。日露戦争が終わった一年後、「キリスト新聞」は「日露戦争で俄国損害」⁶³という記事の中で、西洋国家の中でロシアだけが打撃を受けて終わったように報じている。しかし、日本は日露戦争を「第三の

アジア攘夷運動」、すなわち西洋勢力の全体を清算するための義戦と見ていたので、その対象はロシアだけではなかった。

「日露戦争の世界的意義は本当に大きかった。ただロシアの野望を打破しただけではなく… 西洋の支那侵略を最終的に撃破し、明治維新と日清戦争に至った第三のアジア攘夷運動だった。このように日清戦争、北清事変(1900年の義和団事件)、日露戦争を通して日本はアジアの唯一の防壁として支那を西洋侵略の危機から救い出した。」⁶⁴

植民地時代の末期にまで維持されたこの観点こそ、日本側の日露戦争に対する本心であった。したがって、アメリカとイギリス、フランスなども、日本にとってはロシアのような西洋勢力に過ぎず、日露戦争が終われば結局新しい打倒対象になるということを理解していなかった。同時に尹のような初期キリスト者たちさえ日本人は同じ東洋人として西欧の帝国主義とは明らかに異なるだろうという「代理的な復讐者」の浪漫的幻想に捕らわれていた。このような日本認識は尹だけではなく、安重根を含めたその頃の知識人やキリスト者が白人に対する警戒心とともに一般的に持っていた観点であった。⁶⁵

(3) 「乙巳条約(勅約)」直後の韓国キリスト者の日本認識

日露戦争以後、朝鮮半島を侵略した日本は、1905年7月27日に締結されたアメリカとの「桂・タフト覚書(密約)」を根拠として韓国(大韓帝国)の外交権を奪うことに拍車をかけた。「キリスト新聞」も乙巳勅約が公式締結された11月17日直後の1906年1月に「日本が韓国で権力を握ることをアメリカが許諾した」という記事を載せたように、この条約の背後にアメリカ政府も関与していることを明らかにした。⁶⁶「皇城新聞」は乙巳勅約の締結直後に「外交断絶の日は、即ち大韓の無国の日である。他人に外交権を委託し、外国に譲与しても、それは亡国同様だ」⁶⁷と嘆いた。乙巳勅約を目撃してから初めて日露戦争に対する「義戦論」が持つ虚構性を悟ることになった。尹も「韓国の独立は今日の(1905年11月18日)午前一時から二時に静かに消えてしまった」⁶⁸と乙巳勅約によって事実上独立喪失状態に転落したことを認めた。その状況がさらに悪化した翌年(1906)には次のように日本を批判した。

「日本の保護政治下で韓国は以前より十倍は悪くなった。…日本人は彼らの国とイギリス、そしてアメリカでは着物を着た天使かも知れないが、韓国では毒蛇だ。」⁶⁹

しかし、尹は本来「日露戦争」直前の1903年に「日本を非西洋国家の中で唯一に文明化達成に成功した優等国だけではなく、非西洋の諸国家が追い求めなければならない模範としての真の社会」⁷⁰と考えた。また、乙巳勅約が締結された直前である1905年7月にも「日本は光、喜び、幸せな祝福された国として東洋のパラダイス」⁷¹と評価した。このような尹の日本認識は、「文明化」を掲げた欧米人の観念と同様に、特にアジアでは文明化達成の可能性が稀薄な中国と対比される日本の文明化過程に注目しながら形成された。⁷²したがって、尹は、植民地として転落した朝鮮の運命に対して「神の刑罰」と評価し、「朝鮮人はただこの状況を受け入れて、それを最大限に利用しなければならない」⁷³と考えた。

同様に西洋宣教師に頼っていたキリスト教界は、相変らず伊藤統監の保護政治に期待しながら日本の近代化に対する憧れと称賛の言葉を続けていた。「キリスト新聞」の乙巳勅約直後の報道を見ると、「日本教会が進歩している」や「日本教育の興旺すること」、「日本女性の教育が発達した姿」のような、日

本のキリスト教と教育制度が発展しているため、模範として学ばなければならないという論旨を続けている。⁷⁴さらに、乙巳勅約に抵抗した義兵が退いたという知らせを傍観者的な態度で扱っている。⁷⁵アペンゼラーが発行した「朝鮮キリスト人会報」と統合し1907年11月から新しく発刊された「イエス教新報」は「日本博覧会」、「日本東京の留学」など日本の先立った近代文物とそれを学びに行った朝鮮人留学生の生活を紹介している。⁷⁶日本の近代博覧会に対するそのような視線は、1920年代まで引き継がれている。⁷⁷これは、乙巳勅約以後から高まった反日意識の風潮の中でも、西欧近代文明とともに宣教活動を展開しなければならないキリスト教の立場から日本に対する憧れと期待を刺激しようと考えたとみられる。これは乙巳勅約締結の直後に大きく反発した社会一般の雰囲気とは距離を置いた韓国キリスト教の姿であった。

4. おわりに

日清戦争(1894-5)と日露戦争(1904-5)に至る一連の国際戦争の戦地は主に朝鮮半島であった。東学教徒を含めた多数の朝鮮民衆は、「斥倭」を叫んで反日的風土が蔓延していたが、近代化を一つの宣教目的として設定していた韓国のキリスト教は、決して日清戦争当時の反日認識を持つことはなかった。むしろ明治維新を通して先に近代化を達成した日本の勝利を願っていた。国権被奪に最も直接的な原因を提供した「日露戦争」(1904)に対しても、韓国キリスト教は日本の勝利を支持する姿勢を見せる。韓国キリスト教は日本の近代化に対して「学ばなければならない」(学日)とか、「理解しなければならない」(知日)対象として評価する傾向にあった。つまり、「日清・日露戦争」時期は、韓国キリスト教によって、日本に対して「学日」と「知日」という微妙な日本認識が混在しながら交差した時期である。多数の宣教師と韓国人キリスト教指導者は、表皮的な日本の近代化が引き起こした錯視効果によって、日本に対する劣等意識と劣敗感に基づく「学日」の立場を「親日・附日」の体質として高揚させていったことも事実である。一方、乙未事変と乙巳勅約の反転と失望を経験した後、冷静な「知日」の立場に立ったグループは、「反日・抗日」の日本認識を芽生えさせていった。後者の流れはその後、韓国キリスト教が中心になった1919年、3.1独立運動と上海臨時政府樹立として登場することとなる。

日清・日露戦争をめぐる1910年以前の韓国キリスト教の日本認識は、日本の近代化が韓国キリスト教に肯定的な役割を果たすことになるという期待と憧れ、信頼に基づく「学日→親日→附日」としての体質と、西欧のキリスト教思想が欠けたまま近代文明と技術、帝国主義性だけを吸収していった近代日本の実態に直面した瞬間、「知日→反日→抗日」と体質を転換させていったと言える。したがって、「日清・日露戦争」をめぐる時期は、韓国キリスト教が近代日本の実態を知る試行錯誤の前理解の過程であった。

¹ 全琿準は「両湖倡義領袖」として忠清道觀察使に発送した「湖西巡相に告示する」という文書でも「日本の侵略者たちが軍隊を動かして、我が軍部を逼迫してうちの民衆を心配するようにしたら、どうして堪えることができるか。昔の壬辰乱(文禄・慶長の役)に蛮夷が侵略して、闕廟を燃やして君親を恥をかくようにして民を殺した。臣下と民皆が悔しく思って長年の歳月の間忘れることができない限りだ」と強調した。(全琿準、「湖西巡相に告示する」；宋讚燮、安泰貞、『韓国の檄文』(ソウル：ダルン生角、2007)から再引用。)

² 『全琿準供草』参照。；金容燮、「全琿準供草의 分析 -東學亂研究、」『史學研究』2、(1959)参照。

³ 琴秉洞、崔惠珠訳、『朝鮮人の日本観』(ソウル：ンヒョン、2008)、103頁。

- 4 「宣傳の勅語」、『官報』、1894年8月2日。
- 5 内村鑑三、「日清戦争の義」、『國民之友』、第234号、1894年9月号、18-23頁。
- 6 “韓國에 來頭形便、” 「大韓毎日申報」、1904年11月17日。
- 7 “韓國에 顧問官、” 「大韓毎日申報」、1904年12月31日。
- 8 H. G. Underwood's letter to Dr. Ellinwood, 8. 27. 1887.
- 9 H. G. Underwood's letter to Dr. Ellinwood, 8. 10. 1890.
- 10 『尹致昊日記』、1895年1月12日。
- 11 『尹致昊日記』、1894年6月23日。
- 12 『尹致昊日記』、1894年5月30日。；1895年2月18日。
- 13 『尹致昊日記』、1894年9月27-28日。
- 14 『尹致昊日記』、1894年11月27日。
- 15 『尹致昊日記』、1895年8月5日。
- 16 梁賢惠、『尹致昊と金教臣その親日と抗日の論理：近代朝鮮における民族的アイデンティティとキリスト教』(東京：新教出版社、1996)、21頁。； 양현혜、『윤치호와 김교신 : 근대 조선의 민족적 아이덴티티와 기독교』(서울:한울, 2009)、29頁。
- 17 西欧文物及びキリスト教の受容までも肯定的に受容した金玉均、徐光範、朴泳孝、尹雄烈(尹致昊の父親)などの開化派が含まれたこの調査視察団は、1880年には「韓清日」三国の連帯のための「三和主義」を提唱しながら日本が設立した「興亜会」にも積極的に参加した。しかし、これらは日本が表面的に掲げた「交隣と連帯」にのみ注目したため、その裏に隠された「侵略と差別」は見逃してしまった。(河宇鳳、「開港期修信使の日本認識」、『朝鮮時代韓国人の日本認識』、(ソウル: 慧眼、2006)、313頁。)
- 18 『尹致昊日記』、1895年10月8日。；12月11日。；12月26日。；1897年9月15日。；柳大永、『開花期朝鮮とアメリカ宣教師』(ソウル: 韓国基督教歴史研究所、2004)、290頁。
- 19 『尹致昊日記』、1895年9月7日。
- 20 『尹致昊日記』、1895年11月17日。
- 21 L. H. Underwood, *Fifteen Years among the Top-Konts*, 119.
- 22 L. H. Underwood's letter to Dr. Ellinwood, 2. 2. 1895.
- 23 柳大永、『開花期朝鮮과 アメリカ宣教師』、348頁。
- 24 白樂濬、『韓国改新教史』、255 頁。
- 25 『AH報告書』、290頁。；柳大永、『開花期朝鮮과 アメリカ宣教師』、302頁。再引用。；「Blazing Indignation」、KR2 (Dec. 1895) 476-478頁。
- 26 Sill to SS, Feb. 5, 1896, DD.；柳大永、『開花期朝鮮과 アメリカ宣教師』、110頁。再引用。
- 27 「京城在留の外國人中最も勢望を有するスクラントン及びアンダーウート夫人は関后在世の時には常に王宮に出入しつつありて人其何の故たるを知るもの絶えて稀れなりしが昨今に至りて故関后は耶蘇教の信徒なりしことを発見せり故関后が在留外人中に評判宜しきは蓋し之が為めにして過日の騒動の痛く在留外人に刺激を與へたる所以のものも亦是等の關係與りて力あるべしと云ふ。(時事新報)」「婦人新報」、第11号1895年12月25日、「雑報 朝鮮の故王妃は基督教徒也)」
- 28 関庚培、『韓国基督教會史』、213頁。
- 29 釋尾春菴、『朝鮮併合史』(ソウル: 太山文化社、1985)、1926、113-115頁。
- 30 「獨立新聞」、1898年2月6日。
- 31 「答疏齊先生書、」 「皇城新聞」、1900年6月23日。
- 32 “韓清危機、” 「皇城新聞」、1900年8月8日。
- 33 “日本英国협향함、” 「그리스도신문」、1902年2月27日。； “日本數交(일본수호)、” 「그리스도신문」、1902年3月13日。； “日英條約(일영도약)、” 「그리스도신문」、1902年4月17日。
- 34 Allen Papers, MF. 306, Allen's Letter to Hunt, July, 29, 1900.；アレン(Allen)は、アメリカ公使時代に反日感情で満たされて来た李承晩に日本を現実として受け入れなさいと忠告したこともある。；“Mr. Rhee's Story of His Imprisonment、” 290-291, Robert Oliver, 黄ジョンイル訳、『李承晩 : 神話에 가린 人物』(ソウル: 建国大学出版部、2002)、96頁。
- 35 *Mutel's Diary*, 1897年8月23日。；1898年9月10日。
- 36 金源模、『알린의 日記』、324頁。
- 37 *The Korea Review*, Feb. 70~77.；F. H. Harrington, 李光麟、『開化期韓美外交』、216-354頁。
- 38 『尹致昊日記』、1902年5月7日。
- 39 「現在状況を見ると、日本が主導権を掌握するようになるようです。… 日本が主導権を取るようになれば韓国での私たちの都合は確かによくなるでしょう。私たちは日本が南部地域で勢力を確保しようとするとき邪魔になる行動をしてはいけません。ロシア人たちは韓国で紛争を起こすのに全然ためらうことがないです。しかし日本も自分の勢力を拡張させるためなら確かに紛争を起こすでしょう。」(H. G. Underwood's letter to Dr. Brown, Nov. 28. 1903.)

- 40 「ロシアが覇権を握るようになれば、長い間韓国で重ねてきた私たちの働きは止めざるを得ないかも知れない。… 働きの機会だけではなく、私たちに対する韓国人の態度も冷笑的なものとなるはずであり、私たちの未来に多くの障害が生ずるでしょう。あるいは自ら撤収するようになるかも知れません。」(H. G. Underwood's letter to Dr. Brown, Nov. 28. 1903, Seoul, Korea.)
- 41 H. G. Underwood, 上の手紙
- 42 「韓国(大韓帝国)の政治的状況は絶えず悪化の一路です。何か事が起こらなければならないのです。… 現在の状況において私たちは、戦争がむしろ利得になる方法を捜そうと思います。… しかし正義(Justice)は韓国政府からますます遠ざかっており、何か措置が必要です。外勢に対する恐怖心だけなくなれば、韓国自らがより良い状況を作るための変化を導くことができると確信します」(H. G. Underwood, 上の手紙.)
- 43 「安重根問訊調書」、『韓国獨立運動史資料』第6巻、171頁。
- 44 張錫興、「安重根의 對日本認識과 哈爾濱義擧、」『教會史研究』、第16号(2001年6月)、38頁。
- 45 *The Korea Review*, Feb. 1904, pp.70~74.
- 46 H. G. Underwood's letter to Dr. Brown, Feb. 18. 1904, Seoul, Korea.
- 47 “日不得不戰、”『皇城新聞』、1903年10月1日。
- 48 “賀日俄講和의 速成、”『皇城新聞』、1905年9月9日。; “論日俄講和 の 速成原因과 日本輿論의 失望、”『皇城新聞』、1905年10月2日。(柳永烈、「韓末愛國啓蒙言論의 日本認識、」『亞細亞研究』第42号、(1999. 6)、64頁。)
- 49 『尹致昊日記』、1902年5月7日。
- 50 『尹致昊日記』、1903年1月15日。
- 51 『尹致昊日記』、1905年6月5日。; 9月7日。
- 52 梁賢惠、『尹致昊と金教臣』、52頁。; 양현혜, 『윤치호와 김교신』, 59頁。
- 53 「東洋平和論」、『安重根傳記全集』、195頁。
- 54 張錫興、「安重根의 對日本 認識과 哈爾濱 義擧、」41頁。
- 55 「ロシアの動きは天下の公法に従う正義の使徒のように見えるが、その内面にはより悪い心が含まれている。結局、ロシアは何年も経たないうちに狡猾な手段で旅順口を租借し軍港を拡張し鉄道建設をするのに至った」(「安重根問訊調書」、『韓国獨立運動史資料』第6巻、171頁。)
- 56 “論日俄講和의 速成과 日本輿論의 失望、”『皇城新聞』、1905年10月2日。
- 57 “英國과 日本을 比較함이라、”『大韓每日申報』、1904年9月14日。
- 58 『尹致昊日記』、1904年10月4日。; 1905年9月7日。
- 59 『尹致昊日記』、1905年9月7日。
- 60 『尹致昊日記』、1904年6月8日。
- 61 “對露宣戰の勅語、”『官報』、1904年10月10日。
- 62 大浜徹也、「戦時外交とポーツマツ條約」、『近代日本史の基礎知識』、(東京：有斐閣、1982)、193頁。
- 63 “日俄戰爭에 俄國損害、”『그리스도신문』、1906年2月8日。; “俄羅斯와 日本協約、”『예수교신보』、1907年11月27日。
- 64 日本世紀社同人、「聖戰の本義」、『文藝春秋』、1942年1月号、93頁。
- 65 金度亨、「大韓帝國期 啓蒙主義 系列 知識層의 三國提携論、”『韓國近現代史研究』第13集 (2000)、18-21頁。
- 66 “日本이 韓国 권세 잡음을 米국이 許諾함、”『그리스도신문』、1906年1月18日。
- 67 “辨日代外交之風説、”『皇城新聞』、1905年10月5日。
- 68 『尹致昊日記』、1905年11月18日。
- 69 T.H. Yun's Letters to Dr. Young J. Allen, December 25, 1906.
- 70 『尹致昊日記』、1903年1月10日。
- 71 『尹致昊日記』、1905年7月18日。
- 72 東田雅博、「「文明化の使命」とアジア、”『思想』1月号、(東京：岩波書店、1992)参照。
- 73 『尹致昊日記』、1905年11月29日。
- 74 “日本教会가 進歩됨、”『그리스도신문』、1906年2月1日。; “日本教育의 興旺함、”『그리스도신문』、1906年3月1日。; “日本女性の 教育이 發達함、”『그리스도신문』、1906年8月2日。
- 75 “義兵이 물너 감、”『그리스도신문』、1906年6月21日。
- 76 “日本博覽會、”『예수교신보』、1908年1月15日。
- 「東京の平和博覽會は3月10日から開催されたが、すでに朝鮮各地から観光団の出発が頻繁におこなわれている様子だ」(“日本平和博의 開會、”『基督申報』、1922年3月15日。)